都市文化研究　Studies in Urban Cultures
Vol. 18，71−83頁，2016

◇論　文◇

正規教員を目指すことはいかにして可能か
―― 沖縄の非正規教員を事例に ――

上　原　健太郎

◆要　旨

本稿では，「学校から職業への移行」という教育社会学的な観点から，正規教員を目指す非正規教員について論じる。非正規教員の増加が社会問題化しているにもかかわらず，従来の研究は非正規教員を真正面から取り上げてこなかった。数少ない先行研究は，非正規教員が構造的に生み出された存在であり，かれらが30歳前後で正規教員になること，またそれまでの期間，非正規教員としてある程度の満足感を得ていることを明らかにしてきた。その知見を踏まえつつ，本稿では，学卒後しばらくの期間，非正規教員として働き続ける若者がいかなる状況に置かれ，また，非正規教員はその状況をどのように意味づけているのか，さらには，非正規教員として満足感を得ているその背景にはいかなる条件が指摘できるのかという課題を設定した。具体的には沖縄の若者を分析対象とした。

分析から明らかになったのは，流動性・非対称性・多忙といった過酷な状況である。また，やりがい・高給・浪人ネットワークといった条件が，かかる過酷な状況を緩和している点も明らかとなった。とはいえ，それらの条件が，非正規教員を教員世界に囲い込んでいる点も浮かび上がってきた。しかも，非正規教員の「正規教員になる」という達成志向が，時間の経過に伴って徐々に希薄化していく点も確認できた。つまり，30歳前後で正規教員になること，また，正規教員になるまでの期間，非正規教員としてある程度の満足感を得ている，という従来の主張からはこぼれ落ちる，深刻な現実が浮かび上がってきたのである。

キーワード：非正規教員，正規教員，学校から職業への移行，沖縄，生活史

（2015年9月4日論文受付，2015年11月6日採録決定 『都市文化研究』編集委員会）

1. 課題設定

若年労働市場が大きく変容した1990年代以降，フリーターや若年失業者など，学卒後すぐに企業に入社しない若者に社会的関心が集まった。こうした状況に対し，若者の「学校から職業への移行」[1]に関する研究が，教育社会学を中心に蓄積されてきた（苅谷・本田編 2010; 乾 2010; 山内・原編 2010など）。いわゆる，「若者の非正規化」と呼ばれる事態は，新規学卒一括採用を特徴とする民間企業への就職希望者だけでなく，公務員や大学教員といった高学歴専門職の領域にも拡大しつつある（布施 2008，早川・松尾 2012，上林 2012，渡邉 2015）。本稿は，こうした研究動向を踏まえつつ，これまでほとんど触れられてこなかった非正規教員[2]に焦点を当てる[3]。なお，本稿では紙幅の都合上，公立の小中高等学校で働く非正規教員の若者に議論を限定する。

近年，非正規教員の若者が増加している（後述）。かかる事態に対し，文部科学省（以下，文科省）は，政策的な観点から検討会議を開催している[4]。非正規教員への社会的関心の高まりは，「非正規教員」というワードが新聞記事に登場した件数をみても明らかである。図1は，朝日新聞，読売新聞，毎日新聞，の各種データベースを利用し，「非正規教員」というワードが記事に登場した件数を年別に示したものである[5]。

新聞によって多少のばらつきはあるものの，2000年代後半以降，掲載件数が増加傾向にあることがわかる。ここからは，非正規教員という存在が，2000年代後半以降に次第に注目されるようになったことがうかがえる。

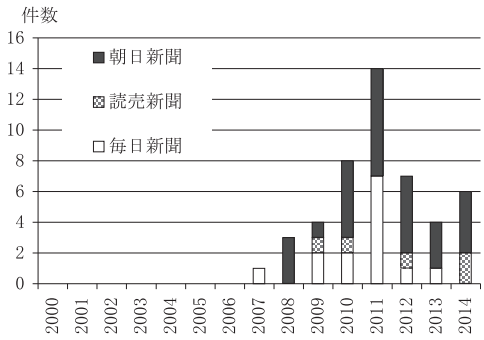

図 1 「非正規教員」の掲載記事件数の推移

こうした状況にもかかわらず，非正規教員の存在は既存研究において看過されてきた（油布 2009：4）。進路未決定者のなかに教員や公務員を目指す者が一定数含まれるという指摘（小杉 2003; 本田 2005; 熊沢 2006）はあるものの，部分的な言及に留まっており，非正規教員に関する研究蓄積は十分ではない。以下では，非正規教員に関する数少ない先行研究を整理することで，本稿の課題を明確にする。

教員労働の特殊性という視角から非正規教員を取り上げた金子真理子（2014）は，非正規教員を真正面から論じた数少ない論考の一つである[6]。とくに，本稿にとって重要なのは，教員給与制度改革との関連で非正規教員の増加傾向を説明した点である。金子によると，教職員給与費は，人材確保法や義務教育費国庫負担制度によって国が一貫して保障してきたが，近年，制度的な変化がみられる。まず，2004 年度の国立大学法人化を契機に，国立大学準拠制が廃止され，教職員の給料・諸手当の額を都道府県が主体的に決定できるようになった。さらに同年，義務教育費国庫負担の総額の範囲内で，給与額や教職員配置に関する地方の裁量を大幅に拡大する仕組み＝総額裁量制が導入され，給与水準の引き下げにより生じた財源で教職員数を増やすことが可能となった。そして金子は，教員人件費と財政力指数の関連を分析した妹尾渉（2010）を引きながら，「教員給与制度改革の経緯を振り返れば，地方の財政状況の悪化のなかで，予算を縮減しながら効率化を図ろうとする思惑が見えてくる。ここには，正規教員の仕事を非正規教員に代替させる搾取の構造が見え隠れする」（金子 2014：45）と述べている。総額裁量制の導入以外にも，文科省による第七次定数改善計画（2001-05 年）が常勤職員限定の少人数授業に非正規教員を加配できるようにしたこと，また，2006 年には市町村でも自費で教員を採用すれば加配できるようにしたことが，非正規教員増加の背景としてある（上林 2013：8）[7]。

以上，金子や上林の説明に従えば，非正規教員が制度的・財政的に生み出された存在であることがわかる。それでは，構造的に生み出された非正規教員は，具体的にどのようなキャリアパターンを歩んでいるのだろうか。

ここで参考になるのが，数量的な観点から教員の実態に迫った舞田敏彦（2013）である。舞田によると，地域差はあるものの，全国的な傾向として（1）教員採用試験の難関化[8]，（2）新規教員採用の高齢化，（3）教員の非正規化が確認できるという。ここからは，新規学卒者としてすぐに正規採用されるのではなく，しばらくの期間を経て正規教員として採用されるというキャリアパターンが示唆される。しかもそれが，次節で詳述するように，非正規教員として働きながら採用試験に複数回トライする「浪人組」（舞田 2013：275-6）が主流を占めている。そのうえで，舞田は，次のような問題提起を行なっている（舞田 2013：277）。

> 新規教員の高齢化が進行している地域においてどういう事態になっているのか，30 代半ば頃の時点で採用された教員のライフコースはどのようなものかを明らかにするのである。問題提起として記録しておきたい。

非正規教員が増加傾向にある今日，舞田の問題提起は重要である。それでは，学卒後しばらくの期間，非正規教員として働き続ける若者はいかなる状況に置かれているのだろうか。

こうした疑問に答えるうえで，小杉礼子の指摘がもっとも示唆に富む。小杉（2003：67-75）は，学卒時から 4 年目までの就業状況の変化から，大卒者の経歴を次の 3 つに類型化した。（1）学卒後すぐに正社員として就職しそのまま同一企業に定着している「正社員・定着」，（2）卒業当初は非正規や無業であったが後に正社員に移行した「遅れて正社員」，（3）調査時点に非正社員雇用者である「非正規社員」。そこでさまざまな比較検討が行われているが，本稿にとって重要なのは，「遅れて正社員」「非正社員」に教員が多いことを指摘し，現在の仕事の満足度などについて次のように結論づけている点である。

> 数年のうちに教員をはじめとする専門職，あるいは，公務員になった場合，職業への満足や専門性の発揮が見られ，（筆者 ――「正社員・定着」に比べて）キャリア形成の上でも本人の満足感の上でも遜色なく見える。

つまり，「遅れて正社員」「非正社員」のいずれにおいても，教員の場合，ある程度の満足感が得られているのである。それでは，非正規教員としてある程度の満足感を得ることを可能にする条件とはいったいなにか。そもそも，非正規教員はいかなる状況に置かれ，自らの状況をどのように認識し，意味づけているのだろうか。

本稿は，沖縄の非正規教員の生活史に着目し，上記の課題に応えようとするものである。沖縄を取り上げる理由は，47 都道府県でもっとも非正規教員率が高く，新規教員の高齢化が進行する地域だからである。つまり，非正規教員の若者を検討する際に，沖縄の若者から多くの示唆が得られることが期待できる。

また，生活史に着目する理由は，その方法論的視座が，本稿の目的を達成するうえで有効だと判断したからである。今日まで，生活史法にはさまざまな議論が展開されているが[9]，本稿では上記の課題を達成するために，生活史法のもっとも基礎的な視座を提示した K. プラマー（1983＝1991）の考え方に依拠したい。プラマーは，本質面，調査面，教育面，実質面における生活史研究の役割について検討し，とくに本質面において，①個人の主観的現実，②過程，多様性，変化，③全体を見わたす視座，④歴史を捉える道具，といった特性を挙げている（1983＝1991：97-107）。①に関しては，「人びとが自らの生活や自らを取り巻く世界を解釈する仕方」に接近できること，②に関しては，「日常の生活経験のなかで演じられる混乱，多義性，矛盾」について検討できること，③に関しては，身近な社会集団とのかかわり，状況についての個人的規定，自身の生活や外部世界の歴史変化など，それぞれの部分が互いに連動しているという視点から個々の生活史の全体性を把握できること，④に関しては，個人の生活史を歴史的な変化との連関によって検討できることが示されている。以上，非正規教員の置かれた状況と意味づけに着目し，その背景にある諸条件を検討するうえで①②③は有効であり，また，学卒後しばらくの期間を経て正規教員になるという教員固有のキャリアパターンを考える際も，個人の生活や外部世界の変化を視野に収めるという生活史法の視点（③④）は有効である。

本稿の構成は以下の通りである。まず，官公庁の統計データを参照し， 正規教員を目指す若者の一つのキャリアパターンを抽出する。とくに，全国と沖縄の比較から，沖縄がそのパターンを考えるのにふさわしい地域である点を確認する（2 節）。そのうえで，筆者が行なった生活史調査の概要を説明し（3 節），沖縄の若者の語りから非正規教員が置かれた状況とその意味づけについて記述する（4 節）。最後に，4 節で得られた知見を別の角度から考察し（5 節），本稿の知見をまとめる（6 節）。

2. 教員希望者のキャリアパターン

前節で確認した通り，進路未決定者のなかに教員採用試験に向けて浪人生活を送る者が一定数含まれる。データの制約上，進路未決定者から「浪人組」だけを抽出し，その規模を特定することは困難だが，ひとまずここでは，どの程度の者が進路未決定者として 4 年制大学や短期大学を卒業しているのかを確認しよう。

表 1 は，2011 年度における大学卒業後の進路状況を示したものである。全国をみると，大卒全体の約 6 割が就職を決定し（62.3%），それに大学院や専修学校などへの進学者を含めると約 8 割（78.5%）が進路決定者であることがわかる。裏を返すと，およそ 2 割の者が「進路未決定」[10] であり，そのなかに，正規教員を目指す「浪人組」が一定数含まれていると推測される。それに対し，沖縄県内の大学生をみると，進路決定者は全体の 6 割程度に過ぎず（61.7%），3 割程度が進路未決定であることが確認できる（32.5%）。沖縄の大卒者が公務員就職を希望する傾向にあることに鑑みると（上原 2014），その進路未決定者のなかに少なくない規模で「浪人組」が含まれていることが推測される。

表 1　大学卒業後の進学状況（%）

	卒業者	進学者	就職者	臨床研修医	専修学校など	進路未決定	不詳・死亡
全国	619229	12.6%	62.3%	1.4%	2.2%	19.2%	2.3%
沖縄	4,336	8.2%	49.7%	2.1%	1.7%	32.5%	5.8%

注：『学校基本調査』（2011 年度）
　：短期大学のデータ含む

次に，教員採用試験の競争率をみてみよう。『教育委員会月報』（各年）のデータをもとに，教員採用試験の受験者数と採用者数を抽出し，その競争率（受験者数／採用者数）の推移を示したのが図 2 である。まず，全国の採用試験の競争率が 90 年代に入って上昇し，00 年代にやや下降傾向にあることが確認できる。それに対し，沖縄の競争率は，年度によって多少の変動はあるものの，全国の値を大きく上回って推移している点に特徴がある。つまり，教員採用試験の競争が激化した地域として沖縄を把握することができる。

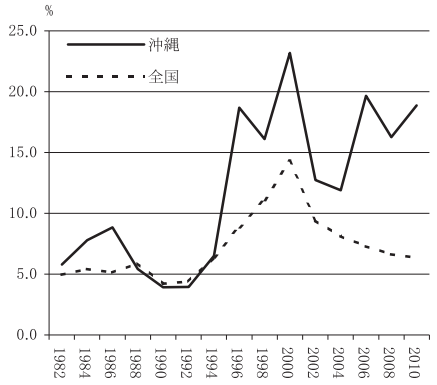

図 2　教員採用試験の競争率（受験者／採用者）

注：『教育委員会月報』（各年）
　：公立小中高校の合計

教員採用試験における競争の激化という側面は，新規採用者の年齢構成を検討するとより具体的に把握できる。2013 年度に新規採用された教諭の年齢構成比を示した

のが表 2 である。たとえば小学校の値に注目すると，全国では 13173 人が教諭として新しく採用され，その約半数が「25 歳未満」（51.4%）となっており，順に「25-29 歳」（27.8%），「30-34 歳」（10.2%）と割合が低くなっている。つまり，採用試験の競争が厳しさを増すなか，学卒後すぐに採用される者は採用者全体の半数にも満たないのである。ただし，新規採用者のおよそ 8 割弱が 30 歳未満であることから，採用者の多くが学卒後しばらくの期間を経て採用されている点が確認できる。こうした側面は，中学校と高等学校においても指摘できる。かかる傾向は，沖縄においてより顕著である。たとえば，沖縄の小学校の値をみると，全国でもっとも割合の高かった「25 歳未満」は 16.5%に過ぎず，「25-29 歳」（38.7%）と「30-34 歳」（30.3%）が全体の約 7 割を占めている。要するに，学卒後しばらくの期間を経て採用されるという傾向は沖縄にも該当し，その期間がより長いのが沖縄の特徴といえる。

表 2　新規採用教諭の年齢構成比（%）

	小学校		中学校		高等学校	
	全国	沖縄	全国	沖縄	全国	沖縄
25歳未満	51.4%	16.5%	41.1%	11.2%	32.9%	9.6%
25-29歳	27.8%	38.7%	33.4%	38.2%	33.3%	50.9%
30-34歳	10.2%	30.3%	12.3%	25.3%	15.9%	25.7%
35-39歳	4.3%	8.1%	5.6%	14.7%	7.3%	8.4%
40-44歳	2.7%	4.2%	3.3%	5.9%	4.1%	3.0%
45-49歳	1.9%	1.8%	2.6%	2.4%	3.1%	0.6%
50-54歳	1.0%	0.0%	1.1%	1.8%	1.5%	1.2%
55-59歳	0.4%	0.4%	0.4%	0.6%	0.5%	0.0%
60-64歳	0.2%	0.0%	0.3%	0.0%	1.4%	0.6%
合計	13173	284	8152	170	6321	167

注：『学校教員基本調査』（2013 年度）

それでは，学校を卒業し，新規教員として採用されるまでの期間，どのような移行過程を歩んでいるのだろうか。詳細は後述するとして，ここでは，『学校教員基本調査』（2013 年度）の「新規教諭の採用前の状況」に関する基礎的なデータをてがかりに，採用前の一端を描出しよう（表 3）。小学校を例にとると，まず，全国の新規採用者の 48.9%が「既卒」と回答し，その内訳をみると（表 4），その多くが「非正規教員」[11]（79.9%）であることがわかる。こうした傾向は沖縄でも確認できる。沖縄の小学校教員の新規採用者の約 8 割が採用前の状況を「既卒」と回答し，その内訳をみると，8 割が「非正規教員」であることが確認できる。また，中学校，高等学校においても同様の傾向が指摘できる。なお，表 3 によれば，新卒採用者の半数以上が国公立大出身で，その傾向は沖縄でより顕著である。この点については 3 節の調査概要で再び触れる。

表 3　新規採用教諭の採用前の状況（%）

		採用者		新卒	既卒
				うち、国公立大出身	
小学校	全国	13020	51.1%	58.2%	48.9%
	沖縄	283	22.3%	87.3%	77.7%
中学校	全国	8074	40.1%	60.9%	59.9%
	沖縄	170	12.4%	100.0%	87.6%
高等学校	全国	6184	33.9%	57.6%	66.1%
	沖縄	165	16.4%	92.6%	83.6%

注：『学校教員基本調査』（2013 年度）

表 4　表 3 における既卒の内訳（%）

		既卒					
		小計	官公庁	民間	自営	非正規教員	その他
小学校	全国	6365	5.7%	3.3%	0.4%	79.9%	10.6%
	沖縄	220	2.3%	2.3%	0.5%	80.0%	15.0%
中学校	全国	4840	6.3%	3.9%	0.4%	79.2%	10.2%
	沖縄	149	6.0%	1.3%	0.0%	84.6%	8.1%
高等学校	全国	4088	6.7%	6.0%	0.2%	75.5%	11.6%
	沖縄	138	2.9%	4.3%	0.0%	85.5%	7.2%

注：『学校教員基本調査』（2013 年度）
　：「ポストドクター」は該当者なしのため除外。

最後に，非正規教員に関する近年の動向をおさえておく。文科省は「公立義務教育諸学校の学校規模及び教職員配置の適正化に関する検討会議」（全 17 回）の第 14 回会議（2012 年 6 月 19 日開催）で，非正規教員増加の問題を取り上げている。その会議の配布資料「非正規教員の任用状況について」によると，2005 年度の非正規教員は 8.4 万人にのぼり，全体の 12.3%を占め，その内訳をみると，非常勤講師が 3.6 万人（5.2%），臨時的任用教員が 4.8 万人（7.1%）となっている。しかしそれが 2011 年度になると，非正規教員が 11.2 万人（16.0%）と実数割合ともに増加し，その内訳は，非常勤講師 5.0 万人（7.2%），臨時的任用教員 6.2 万人（8.8%）となっている。さらに興味深いのは，その資料のなかで，小・中学校の教員定数に占める臨時的任用教員の割合がもっとも高い都道府県として沖縄が紹介されている点である（全国 7.0%，沖縄 16.8%）。以上から，非正規教員の増加は全国的な傾向として確認できるものの，それがもっとも深刻化した地域として沖縄を位置づけることができる[12]。こうした側面は，琉球大学教育学部（2011）が独

自に実施した調査結果からも補完的に理解できる。それによると，2010〜11 年時点で，沖縄県内の公立小中高校の教員の約 2 割が臨時的任用教員であり，とくにその傾向は 20 代（81.6%）と 30 代（24.7%）に顕著である。

以上，学卒後しばらくの期間，非正規教員として働きながら 30 歳前後で新規教員として採用されるというパターンを抽出した。当然，上記のパターン以外にも移行の在り方はさまざまである。しかし，非正規教員の増加に社会的関心が高まるなか，従来の研究が非正規教員に焦点を当ててこなかったことを踏まえると，限定的ではあるとはいえ，ある特定のパターンを抽出し，その経験を記述することは重要である。

3. 調査概要

筆者はこれまで，沖縄で生活史調査を断続的に実施してきた。調査期間は 2008 年から現在までである。対象者のうち 9 人が非正規教員であり，そのうち典型事例と思われる 5 人を本稿の分析対象とする（表 5）。

表 5　調査対象者の概要

	性別	生年	出身	赴任学校数	非正規教員経験年数
アキコ	女性	1985	糸満市	4	3年
ヒロシ	男性	1980	県内離島	4	6年9ヶ月
トモコ	女性	1975	豊見城市	11	14年
ユキエ	女性	1986	糸満市	3	4年3ヶ月
タツヤ	男性	1979	豊見城市	3	5年

調査の場所は，学校やファーストフード店などさまざまであり，対象者に許可をとり，IC レコーダーを回した。録音したインタビュー記録は筆者自ら文字に起こした。なお，言葉の繰り返しや意味の重複部分は，前後の入替えや削除など，若干の修正を施している。それでは，対象者 5 人の簡単なライフヒストリーを紹介しよう。

アキコさんは，1985 年に 4 人きょうだいの長女として沖縄県糸満市で生まれた。中学まで地元の公立の学校に通っていたが，英語が学べるという理由で校区外の公立高校に進学した。英語への興味関心は高卒後も持続し，県外の私立短期大学に進学した際も同様の学科を選んでいる。また，4 年制私立大学の英文科に編入し，中学高校の英語の教員免許を取得した。大卒後は，進路未決定のまま沖縄に U ターンし，英語教員を目指すべく，教員採用試験に向けて勉強を開始した。また，地元でアルバイトをしつつ，通信教育で小学校の教員免許を取得し，その後，臨時の支援ヘルパー，学校事務の臨時職員，非常勤講師と自立支援員，特別支援学校での非正規教員と，4 つの職場を転々としてきた。調査時点で，非正規教員経験年数は約 3 年，学校事務の臨時職員を含めると 3 年半となる。1 回目調査時は 23 歳，2 回目調査時は 28 歳であった。対象者のなかで，唯一，教員採用試験に合格し，次年度から本採用が決定している。

ヒロシさんは，1980 年に沖縄県の離島で生まれた。両親と 8 人きょうだいの 10 人家族で，本人は末っ子である。父親は公務員，母親は農業に従事してきた。地元の公立高校を卒業後，県外の 4 年制私立大学に進学し，商業関係の教員免許を取得した。進路未決定のまま沖縄本島に U ターンし，1 年間，プールの監視員や寿司配達のアルバイトをしながら通信教育で小学校教員の免許を取得した。免許取得後，非正規教員として県内の 4 つの小学校を転々とし，調査時点で非正規教員経験年数は 6 年 9 ヵ月であった（当時 31 歳）。

トモコさんは，1975 年，沖縄県豊見城市（旧豊見城村）で生まれ，両親，長女，長男，本人，次男の 6 人家族である。父親は建設関係の自営業，母親は主婦である。トモコさんは，地元の公立小中学校に通い，高校は那覇市内の公立学校を卒業した。大学は県外私立短期大学に進学し，大学では図書館の司書免許と幼稚園・小学校教員の免許を取得した。卒業後は進路未決定のまま沖縄に U ターンし，民間の保育園，市立図書館，小学校の図書館，市役所で臨時職員として勤め，その後は 14 年間，11 の小学校を非正規教員として転々としてきた（当時 36 歳）。

ユキエさんは，1986 年，沖縄県糸満市で生まれ育った。両親と妹・弟の 5 人家族で，父親は現在，農業関連の職場で臨時職員として勤務し，母親は飲食店の夜勤パートとして週 5〜6 回働いている。本人は，高校まで地元の公立学校に通い，高校卒業後，1 年間の浪人生活を経て，県内の私立短期大学に進学した。そこで小学校教員の免許を取得し，進路未決定のまま大学を卒業した。その後，3 つの小学校で計 4 年 3 ヵ月間，非正規教員として働いてきた（当時 26 歳）。

タツヤさんは，1979 年，沖縄県豊見城市で生まれ，家族は両親と弟の 4 人である。両親ともに元銀行員で，現在は新聞販売店で働いている。タツヤさんは，地元の公立の小中高校を卒業し，大学は指定校推薦で県外の 4 年制私立大学に進学した。教員になりたいという中学時代からの夢を叶えるべく，大学で商業の免許を取得し，進路未決定のまま沖縄に U ターンした。はじめの 1 年半は，県の公的機関で臨時職員として働き，その後，知人からの紹介で県内の民間企業に就職した。本腰を入れて教員を目指すべく，その民間企業を 2 年半で辞め，某自治体の特別支援教育関連の求人募集に応募し，ヘルパーとして 2 年働いた。その間，通信教育で小学校教員免許を取得し，3 つの小学校を非正規教員として転々としてきた。調査時点で，非正規教員経験年数は約 5 年。また，

ヘルパー 2 年目の時に結婚し，現在，3 歳と 1 歳の子どもがいる（当時 32 歳）。

以上，本稿の対象者全員が学卒後しばらくは非正規教員として働いており，本稿の事例として適している。加えて，表 3 で確認したように，新卒採用者の多くが国公立大学出身者であり，その傾向が沖縄においてより顕著であることを踏まえると，対象者が私立大学出身者であることも事例選択として妥当性があると考える。なお，本稿では取り上げていないものの，対象者のなかには国公立大学出身者 2 人が含まれている。いずれも新卒採用ではないが，私立大学出身者との対比から有意義な知見が導き出せるかもしれず，それは今後の課題としたい。

それでは，5 人の語りを検討することで，非正規教員が置かれた状況とその意味づけについてみていこう。

4. 過酷さとやりがいのあいだで

4.1. 流動性・非対称性・多忙

まずおさえておきたいのは，一つの学校現場に在籍する期間（在籍期間）の短さである。対象者一人ひとりの在籍期間をみていくと，アキコさんは最長 1 年・最短半年，ヒロシさんは最長 2 年・最短 1 ヵ月，トモコさんは最長 2 年・最短 1 ヵ月，ユキエさんは最短最長ともに 2 年，タツヤさんは最長 2 年・最短 3 ヵ月となっている。ここから，非正規教員として職場を転々としている点が確認できる。こうした流動的な職業生活は，ユキエさんの次の語りに端的にあらわれている。

筆　者：やりがい自体は感じる？

ユキエ：感じる…けど，やっぱり臨時は途中から切れてしまったり，実際に私はここは 7 月までなんですよ。また本務の先生が戻ってこられるので。そのあとのことはよくわからないんですけど，まだ。はっきり決まってなくて。

ユキエさんに対して筆者が調査を行なったのは 2011 年 6 月であった。彼女は翌月の 7 月に雇用契約が切れ，それ以降のスケジュールは未定だと話す。ここで少し補足すると，彼女が現在の職場に非正規教員として赴任したのはちょうど 2 ヵ月前の 4 月であった。つまり，彼女は 3 ヵ月という短い雇用契約のもと，「本務の先生」の代わりに教壇に立っていたことになる。また，やりがいは「感じる…けど」のすぐ後に「在籍期間の短さ」について語っていることから，その「短さ」が否定的なニュアンスで語られていることがうかがえる。

以上，在籍期間が短く，ときに正規教員の欠員補充として教壇に立たなければならない非正規教員は，非常に不安定な状況に置かれている。本採用が決まっているアキコさんはこれまでの非正規教員としての経験を振り返るなかで，「はやく受かりたかった。もうなんていうの，臨時っていうのも不安定だし。もうね，安定かな。落ち着きたいっていうのがあるかな」と語っている。このように，非正規教員の不安定性を強調するアキコさんの語りからは，その対極に位置づく正規教員の安定性を同時に読みとることができる。

さらに，正規／非正規における非対称性は，安定―不安定とは異なる位相においても確認できる。新規採用された 1 年目の教員には初任者研修という研修が義務づけられているが，非常勤講師であったアキコさんは，初任者研修の期間，初任者の代理としてクラスを任された。アキコさんは当時のことを次のように振り返っている。

アキコ：非常勤とかも自分でやってみたら，けっこう辛かったりもあったり。担任じゃないから，なんていうの，担任だったらもっと（生徒に）言えるはずだけど。遠慮する。私が口出しするもんじゃないなと。初任者（正規教員 1 年目の人）のスタイルと自分のスタイルが全然違ってた。（…略…）この先生と同じようにはやりたくはないし，だけどこの先生には「こういう風にやってね」とも言われたりするし。なんていうの，「あいだ」というか。自分が担任だったらやっぱりできるけど。非常勤だから。

筆　者：ストレスたまるな。

アキコ：そう，けっこうストレスたまったこれは。

アキコさんは，自分が正規の担任ではないという理由から，正規教員に対して「遠慮」していたと話し，思うように学級運営ができないことに「ストレス」を感じたという。すなわち，ここから確認できるのは，安定―不安定の軸だけでなく，実際の教育現場において生起する非対称的な力関係であり，非正規教員自身もかかる状況を「不安定」「ストレス」として意味づけていた。

別の角度から，精神的な負担についてみていこう。ヒロシさんは，非正規教員として働き始めたばかりの頃を次のように振り返る。

ヒロシ：あの時（働き始めの頃）の，テレビが何やってたかとか，歌が何が流行ったのかっていうのは分からないですよ。今思ったら。抜けてる。周りをみる余裕ないし。遊んでもいるし，なんかやってもいるけど，仕事に追われてというか。そんな感じ。

ヒロシさんの語りからは，不慣れな仕事に追われていた状況が確認できる。またヒロシさんは，採用試験に向けて勉強時間を確保する必要があると感じながらも，実際にそれができていない現状を次のように表現している。「勉強もしないとけないし。エネルギーがこう分散されてしまって。この葛藤で悩んでます」。

試験勉強の時間が確保できないという葛藤は，他の対象者からも異口同音に語られた。ユキエさんは，日々の授業準備に時間を費やすあまり，試験勉強の時間確保ができないでいる自分自身について「（非正規教員を）やらずに勉強した方がいいのかなって。自分の性格からしたら」と反省的に捉えている。またヒロシさんは，「（正規教員の人は）『忙しい忙しい』って言いますけど，僕からしたら忙しくないだろって思ってます。なんで，早く学校に来て準備して 17 時になったら帰ったらいいんじゃないの？って。僕はそれから 23 時くらいまで勉強するので。（…略…）いやぁもう，ストレスとの闘いです」とし，授業準備だけでなく，試験勉強もしなければいけない非正規教員の多忙さを表現している。子どもが二人いるタツヤさんも，勉強時間の確保について「時間がない」と語っている。

タツヤ：時間がないって言ったらいいわけになっちゃいますけど，なかなか取れないのが現状ですね。
筆　者：実際，どういう形で時間を使って勉強されてるんですか？
タツヤ：（…略…）家に帰って，チビちゃん（子ども）が寝たあとに，自分が起きてたらやるみたいな感じですね。もうどうしても，（子どもを）寝かすので一緒に寝てしまうことがほとんどなんですよ。なので，寝かして，自分が起きてたらやるみたいな感じです。
筆　者：やるときはだいたい何時頃まで。
タツヤ：もう，でも 1 時間やれればいいかなっていう感じで，やっぱり続かないっすね。

以上，非正規教員が置かれた状況とその意味づけについてみてきた。かれらは，学卒後しばらくの期間，学校現場を転々としているという意味で流動的な職業生活を送っており，また，正規教員との非対称的な位置関係に置かれた自らの状況を「不安定」「ストレス」と意味づけていた。精神的負担の側面は，多忙さゆえに採用試験に向けて勉強時間を確保できないことへの焦りや葛藤からも確認できる。

それではなぜ，過酷な状況に置かれながらも非正規教員として働き続けることが可能となっているのだろうか。換言すれば，非正規教員がある程度の満足感を得ているという先行研究の知見をどのように解釈することができるのだろうか。

4.2. やりがい・高給・浪人ネットワーク

まず，非正規教員として働き続けることが可能となっているその背景には，いずれ正規教員になることが期待できることがあるだろう。つまり，正規教員になるという達成志向が過酷な現状を辛うじて支えている，という説明である。しかしながらこうした説明だけでは不十分である。なぜなら，正規教員を目指すという志向性が常に高い水準で維持されているとは限らないからである。この点については次節で論じるが，本項では別の側面から，非正規教員として働き続けることが可能となっているその背景について考えたい。

支援ヘルパーとして小学校で働いていたアキコさんは，教室に通うことができなかった発達障害の子どもが徐々に教室に通うようになったこと，またその過程に教員（ヘルパー）として関われたことに「やりがいはあったかな，とっても。勉強にもなったし」と振り返る。ここからは，やりがいという側面が非正規教員の過酷な状況を緩和させるものとして機能している点が示唆される。

その意味で給料面も看過できない。ユキエさんは，自らの給料について「教員やってない友達と比べたら貰ってはいるとは思います」と話す。実家を離れ，一人暮らしをしているヒロシさんも次のように語った。

ヒロシ：給料はもう，ぜんぜん，大丈夫ですよ。まぁ僕らみたいに一人暮らしの人たちは，生活に余裕はあるんですけど。大丈夫なんですけど。実家から通っている人たちだった場合，すごい貯金できると思いますよ。はい，それくらい（の給料）だと思います。

2 人の語りからは，「教員やってない友人」よりは高給であり，たとえ一人暮らしであっても「生活に余裕はある」と認識している点が確認できる。給料の主観的な高低はその人が置かれた社会状況によって相対的に決定されるはずであり，平均賃金が全国で最も低く，県内の所得格差が非常に大きい沖縄の経済的特性（上原 2013）に鑑みると，公務員の一形態である非正規教員の給料が沖縄県内で優位な条件として現出しているといえる[13]。

最後に，非正規教員として働く若者が周囲に存在することについて考えてみたい。というのも，前節でみたように，正規教員として採用されるまでの期間，多くの者が非正規教員として働いており，とくに沖縄の場合，学校現場で働く 20 代教員の 8 割強が非正規教員であった。ここから示唆されるのは，学校現場や日常生活において，非正規教員あるいは教員希望者間で何らかの交流が行な

われているのではないか，ということである。たとえば，本稿の対象者であるユキエさんは，「（教員希望の）友達と勉強しようってことで集まる」と語っている。ここからは，その交流がユキエさんの精神的な支えとなっていることが推測できる。他の事例を検討することで，もう少し具体的にみていこう。

アキコさんは，友人からの誘いでとある塾に通うことになった。その塾とは，公務員講座といったフォーマルなものではなく，退職した元校長が個人的に開いている「アットフォームな塾」で，口コミで知った県内の教員希望者がそこに集い，試験対策を行っている。週 2 回の参加で 4 千円と格安で，アキコさんはそこで「勉強のやり方」を学んだという。とくに，塾で知り合った 7 人とは，ある時期からグループを組み，塾以外の日も大学の図書館で週 3 回ほど勉強会を開いた。勉強会を始めた最初の年の採用試験では，グループ 7 人のうち 4 人が合格したが，アキコさんは不合格に終わった。しかし「それ（4 人合格）をみたときに，あぁ頑張れば受かるんだなと思ったわけよ。身近な人で，勉強一緒にやってた人で受かっているから，頑張れば受かるんだって思って，それでやる気が出た」。とはいえアキコさんは次の年の採用試験も不合格に終わり，落ち込んでしばらく塾にも行かなくなった。アキコさんが再び，採用試験に向けて取り組み始めたのは，特別支援学校で働き始めたばかりの頃である。

アキコ：この時は土日は塾に行って，平日は朝 5 時に起きて，5 時から 7 時まで（勉強）やって。で，そのあと，だいたい，（仕事の）定時は 17 時なんだけど，17 時にはもう帰れるようにして，17 時からは大学の図書館に行ってから 22 時まで（勉強した）。

ここで注目したいのは，アキコさんがなぜ勉強場所として大学の図書館を選んだのか，という点である。大学の図書館は当時の職場から車で 1 時間ほどの距離にあり，またそこに向かうとなると自宅から遠ざかってしまう。それにもかかわらずそこに通うことを決めたのは，塾のグループの 1 人がそこで試験勉強をしていたからである。アキコさんは，仕事が終わると図書館に向かい，先に着いて勉強をしている友人に合流し，閉館時刻である 22 時まで勉強に励んだ。図書館を出て，23 時過ぎに自宅に着くと，寝支度を済ませて就寝する。朝 5 時に起床し，「起きたよ，今日も頑張ろうね」といったメールをその友人と送りあうことで睡魔と闘い，7 時まで勉強をし，出勤するという毎日を送った。こうした一連の出来事に対して，アキコさんは次のように語っている。

アキコ：仲間の存在は大きいわけ。
筆　者：1 人じゃきついもんね。
アキコ：そうそう，1 人じゃもう眠ろうって感じだった。本当に仲間の存在が大きくてできたかも。頑張ったよ。

アキコさんはその年の採用試験で見事合格し，翌年から小学校での正規採用が決まった。本稿では，非正規教員あるいは教員希望者間で紡ぎ出されるネットワークの総体を浪人ネットワークと呼ぶことにしたい。

以上，やりがい・高給・浪人ネットワークといった条件についてみてきた。ここから指摘できるのは，それらの条件が機能することで，学卒後しばらくの期間，過酷な状況に置かれながらも非正規教員として働くことが可能となっている，ということである。非正規教員でありながらもある程度の満足感を得ている，という先行研究の知見も，こうした条件が背景にあるのだろう。しかしながら，事態はそう単純ではない。次節では，やりがいや高給といった条件の別の側面と，「学卒後しばらくの期間を経ること」が非正規教員の若者に何をもたらすのかについて考察する。

5. 囲い込みと達成志向の希薄化

5.1. 教員世界への囲い込み

非正規教員として 5 年ほど働き，過去には民間企業での職業経験もあるタツヤさんは，教壇に立って教えることについて次のように語った。

タツヤ：教壇に立ってみると楽しいですよ。なので，ちょっと辞められないな。（正規教員を）目指したいなっていうのはあるんですけど。もうかれこれ（民間を）辞めて何年にもなりますのではやく区切りをつけたいなとは思っています。

この語りからは，まず，タツヤさんが教員という職業にやりがいを感じている点が確認できる。さらに興味深いのは「なので，ちょっと辞められないな」という表現箇所である。つまり，タツヤさんは，教員という職業にやりがいを感じているがゆえに，民間企業に戻るのではなく，あくまで教員として正規採用されることを強く望んでいるのである。その意味で，次のヒロシさんの語りは興味深い。

筆　者：沖縄の民間企業受けたいなって思ったことないですか？

ヒロシ：あぁ，ないですね。
筆　者：このへんの企業といいますか。
ヒロシ：企業はないですね。
筆　者：考えたこともないですか？
ヒロシ：ないですね。この仕事は楽しいなって思ってやってるので。
筆　者：先生諦めて，ちょっとハローワーク行って。
ヒロシ：先生諦めてっていうのはないですね。
筆　者：受かるまでやり続けるって感じですか？
ヒロシ：やると思いますよ。まぁ心折れたりもしてるんですけど，結局，自分の一番得意な場所であるので。

上の二つの語りから読みとれるのは，教員という職業にやりがいを感じているがゆえに，その他の職業に転職するという発想が希薄であるか，そもそも教員以外の職業が選択肢として数えられていないことである。要するに，やりがいという条件が非正規教員を教員世界に囲い込む側面が確認できる。

高給についても同様である。仕事と育児を両立させながら勉強時間を確保することが難しいと語ったタツヤさんは，非正規教員を辞めて試験勉強に専念することを配偶者に提案された。それにもかかわらずタツヤさんは，「まだ子どもがいなくてとかだったら考えるんですけど，どうしてもやっぱり子どもがいるので，なかなか踏み切れないなというのが現実」と話している。他にもタツヤさんは，高給である現在の仕事を辞めることができない理由を次のように話した。

筆　者：（臨時教員になって）生活状況は変わりました？
タツヤ：そうですね，もうだいぶ，ゆとりというか，貯金ができるようになりましたね。（…略…）まぁ今，臨時とはいえ，良い給料もらってるので，なかなか，これ辞めたら，次の仕事できっとこの給料はないだろうなって思っているので。っていう，へんな話，腹黒い話ですけど。

ここからも，高給という条件が非正規教員を教員世界に囲い込む側面がはっきりと確認できる。浪人ネットワークに関しても，非正規教員として働き続けることを可能にするという点で同様のはたらきを持っているものと解釈できる。

つまり，やりがい・高給・浪人ネットワークといった条件は，学卒後しばらくの期間，非正規教員として働き続けることを可能にする一方で，非正規教員を教員世界に囲い込み，いわば教員以外の職業的な選択肢（たとえば民間企業への転職機会）をかれらに与えないのである。したがって，教員世界に囲い込まれた非正規教員が非正規としての過酷な現状から脱するためには，是が非でも教員採用試験に合格して正規教員になる必要がある。ここでは，「正規教員になる」という達成志向の維持がもっとも重要となるだろう。しかし，非正規教員として働きながら達成志向を維持することはけっして容易なことではない。

5.2. しばらくの期間を経ること

調査当時 31 歳を迎えていたヒロシさんは，県内の 4 つの小学校を転々とし，7 年近くも非正規教員としてキャリアを積んできた。採用試験は毎年受けてきたが，「あとちょっと」のところで不合格に終わっている。勉強に専念するために仕事を半年休んだこともある。しかし，結果には結びつかず，生活費を稼ぐために再び非正規教員として働き始めた。

筆　者：試験は毎年受けてたんですか？
ヒロシ：毎年。残念ながら，あとちょっとでダメでから（ダメだった）。
筆　者：で，半年勉強されてまた試験を受けて。それもちょっと厳しかった？
ヒロシ：ダメで。もう厳しくて。
筆　者：で，もう現場に戻ろうということで。
ヒロシ：お金，生活しないといけないから。
筆　者：本当なら，ずっと勉強していたいっていう思いがあるんですか？
ヒロシ：受かるまではやっぱり（勉強を続けたい）。仕事しながらだったら苦しいので。長年やってると，何やってるんだろうってふと思う時もありますよね。

注目すべきは，「長年やってると，何やってるんだろうってふと思う時もありますよね」という語りである。つまり，時間の経過にともなって焦燥感にも近い感情がヒロシさんのなかで芽生えているのである。その意味で，塾の仲間が試験に合格するなか，なかなか合格に辿り着けず，しばらく塾に通わなくなった先のアキコさんは（4-2 参照），時間の経過に伴って相対的剥奪感が高まった事例として解釈できる。以下では，トモコさんの事例を検討することで，時間の経過に伴う心境の変化についてみていく。

トモコさんは，調査当時 36 歳で，本稿の対象者のなかで最年長であり，非正規教員としての経験年数も 14 年ともっとも長く，県内の 11 の小学校を転々としてきた。そんなトモコさんを心配する両親は，彼女が正規教員として採用されることを強く望んでいる。

筆　者：ご両親は，正規教員がいいから，勉強しなさいと言ってきますか？
トモコ：はい，それはもう（笑）
筆　者：ずっと言われ続けてきたんですか？
トモコ：はい，ずっと言われてきました。
筆　者：ご両親は心配されていて。
トモコ：うんそうね。いま沖縄はちょっと厳しいので。臨時も，いつこの仕事が無くなるかわからないから。せめてね，安定して欲しいって毎年言われるんですけど。一人だから，食べていければいいかなって。仕事も，別に怠けているわけではないし。

正規教員として採用されて欲しいという親の期待に対し，トモコさんは，「一人だから，食べていければいいかなって。仕事も，別に怠けているわけではないし」とし，非正規教員としての現状を受け入れようとしている。実のところ，トモコさんは，採用試験を毎年受験しているわけではない。

筆　者：試験の方は毎年。
トモコ：うーん，受けたり受けなかったり。
筆　者：受けていない年というのは，やっぱり，忙しかったり。
トモコ：そうですね。勉強もしてないのに受けるのはどうかなっていうのもあって。頑張れないときは受けていません。（…略…）なんか，試験は受かっても受からなくてもいいのかなぁって気持ちが最近，とくに思ってて。やっぱり，子ども（生徒）たち中心に働きたいので，自分が勉強し過ぎて寝不足で，子どもたちにうまくできないくらいだったら試験受からなくても，そのまんま，臨時の仕事があればありがたいし。（…略…）この子たちのために自分が頑張ればいい。自分のことは二の次。

受験しない年がある，というトモコさんの語りは，非正規教員の過酷な現実を端的に物語っている。まず，教員世界に囲い込まれたトモコさんが試験を受けないということは，非正規教員として働き続ける現状を受け入れることに他ならず，その意味で，「受かっても受からなくてもいいのかなぁ」という気持ちが「最近」芽生えている点は看過できない。したがって，トモコさんの事例からは，正規教員を目指し続けるなかで，正規教員になるという達成志向そのものが徐々に希薄化していく点が確認できる[14]。

6. 結論

本稿では，若者の「学校から職業への移行」という教育社会学的な観点から，正規教員を目指す非正規教員について論じてきた。具体的には，沖縄の非正規教員の生活史に着目し，正規教員を目指す非正規教員がいかなる状況に置かれ，その状況をどのような経験として意味づけているのか，非正規教員として満足感を得ているその背景にはいかなる条件が指摘できるのかを検討した。本稿の知見は次の 4 点に整理できる。

まず，非正規教員としての過酷な状況である。学卒後しばらくの期間，流動的な職業生活を送っており，また，正規教員との非対称的な位置関係に置かれた自らの状況を「不安定」「ストレス」と意味づけていた。さらには，多忙さゆえに試験勉強の時間を確保できないことに焦りや葛藤を抱いている点も明らかとなった（4.1）。次に，かかる過酷な状況にあるにもかかわらず，やりがい・高給・浪人ネットワークといった条件が非正規教員として働き続けることを可能にしていた（4.2）。しかしながらそれらの条件は，非正規教員を教員世界に囲い込み，教員以外の職業的な選択肢をかれらに与えないものとしても機能していた（5.1）。しかも，教員世界に囲い込まれた非正規教員は，自らの過酷な状況を脱するために教員採用試験の合格 —— 正規教員になること —— を強く望んでいるにもかかわらず，学卒後しばらくの期間を経ることによって，逆説的にもその達成志向を希薄化させていた（5.2）。要するに，やりがい・高給・浪人ネットワークといった条件は，過酷な状況を緩和させ，非正規教員にある程度の満足感を与えるという点で順機能的であるが，一方で，非正規教員を苛烈な競争世界に囲い込み，時間の経過とともに精神的消耗を帰結するという点で逆機能的である。

従来の非正規教員に関する研究は，非正規教員が構造的に生み出されていること，かれらが 30 歳前後で正規教員になること，それに加え，正規教員になるまでの期間，非正規教員としてある程度の満足感を得ていることを明らかにしてきた。それに対し，本稿は，過酷な状況を緩和させる諸条件を抽出し，その条件が非正規教員としての満足度の背景としてあることを指摘した。また，かかる条件が，逆説的にも，非正規教員を教員世界に囲い込み，時間の経過に伴って正規教員への達成志向を希薄化させること，その延長線上に非正規教員としての過酷な現状を受け入れようとする者がいることも同時に指摘した。つまり，「30 歳前後に正規教員になる」という従来の主張からはこぼれ落ちてしまう深刻な現実 —— 達成志向の希薄化 —— を明らかにした点も，先行研究に対する本稿の学術的な貢献だろう。ここで急いでつけ加

えておかなければならないのは，当然ながら，すべての非正規教員が教員世界に囲い込まれ，達成志向を希薄化させるわけではない，ということである。教員以外の職業を選択する者や，アキコさんのように正規教員への達成志向をなんとか維持しながら合格する者もいる。こうした類型的な把握は量的な観点から詳細に検討されるべきであり，今後の課題としたい。とはいえ，生活史法という質的な方法を採用し，達成志向の希薄化という側面を明るみにしたことに一定の意義があったと考える。

本稿は，教員希望者の若者，とくに非正規教員の移行過程に焦点を当て，議論を進めてきた。学卒後すぐに就職する，という 80 年代頃までの「常識」が揺らぎはじめている現代日本において，若者の移行に関する研究はいまなお重要である。また冒頭で触れたように，「若者の非正規化」という事態は民間企業への就職希望者だけでなく，大学教員，行政職員など，高学歴専門職の領域にも拡大しつつある。それにもかかわらず高学歴専門職希望者に関する移行研究の蓄積はまだまだ不十分である。「常識」の揺らぎが高学歴専門職の領域にも生じているならば，その必然として，高学歴専門職を希望する若者の経験もまた，記述されなければならない。

注

1．移行（transition）に関する研究動向については溝上慎一（2014）が参考になる。

2．本稿では，常勤講師（臨時的任用教員）・非常勤講師の両方を指して非正規教員と呼ぶ。「常勤講師は正規教員と同じくフルタイム（週約 40 時間）働き，学級担任もできる。非常勤講師は『直接担当する授業時間だけ』『週 20 時間』といった限られた時間の指導を担う。いずれも，非正規の身分で教壇に立ちながら正規採用を目指す人が多い」（朝日新聞，2010 年 10 月 23 日，夕刊）。前者に関しては，地方公務員法第 22 条 2 項（1950 年施行）において次のような規定がある。「任命権者は人事委員会規則で定めるところにより，緊急の場合，臨時の職に関する場合又は任用候補者名簿が無い場合においては，人事委員会の承認を経て，6 月をこえない期間で臨時的任用を行なうことができる」。

3．とくに本稿では，移行研究という教育社会学的な観点から，非正規教員の問題を取り上げる。なお，教員・教師という仕事に関する研究はすでに教育学・教育社会学を中心に多数蓄積されている。2009 年時点における油布（2009：10-15）の整理によれば，教員・教師に関する従来の研究は「ストレス，バーンアウト，多忙研究」「教員養成と教師の成長に係る研究」「集団・組織・同僚性研究の領域と問題点」として把握できるという。最新の研究としては，「教師になること，教師であり続けること」を包括的に検討したグループ・ディダクティカ編（2012）や，教師のライフストーリーという視点から中年期にあたる高校教師の教職アイデンティティについて検討した高井良健一（2015），「教育リスク」との関連で部活動顧問の過重負担を取り上げた内田良（2015）がある。しかしながらこれらの研究は，若者の移行という観点から教員を取り上げておらず，さらにいうと，正規教員を目指す非正規教員に焦点が当たることはほとんどなかった。本稿はあくまで若者の移行という観点から非正規教員を論じる。

4．「公立義務教育諸学校の学級規模及び教職員配置の適正化に関する検討会議」（全 17 回）の第 14 回会議（2012 年 6 月 19 日）。他にも，「子どもと正面から向き合うための新たな教職員定数改善計画（平成 25-29 年）」（2012 年 9 月 7 日公表）では，「非正規教員の増加を抑制」する方針が打ち出されている。

5．朝日新聞は「聞蔵Ⅱ」，読売新聞は「ヨミダス文書館」，毎日新聞は「毎索」のデータベースを利用した。「非正規教員」をキーワードに全文検索を行い，本社発行分と地方・地域版の両方を検索対象に含めた。

6．なお，井上いずみ・村松泰子（2007）や新井立夫・石渡嶺司（2013）も非正規教員の問題を取り上げているが，若者の移行という観点から分析したものではない。

7．文科省が作成した非正規教員の任用に関する資料には，臨時的任用教員増加の要因として次の説明がある。「各県で教員の年齢構成平準化などによる採用調整が行われていることや，平成 18 年度以降，国の定数改善計画がないこと。また，地方公務員についての定員削減計画（H18～H22 の 5 年間にわたる『集中改革プラン』）などが考えられる」。

8．舞田（2013：271-272）は，採用試験の難関化の背景として，少子化による採用抑制，不景気による受験者増をあげている。なお，舞田は，数量的な観点から教員の実態を包括的に検討しており，参考になる。

9．たとえば，従来の実証主義的かつ解釈的客観主義的な生活史法を批判的に検討し，対話的構築主義といった独自の方法論を提起した桜井厚（2002），桜井の方法論に薫陶を受けた者による対話的構築主義の批判的継承（桜井厚・石川良子編 2015），その対話的構築主義を批判的に検討した論考（谷 2002，朴 2011，岸 2015）などがある。ただし，本文でも述べるように，プラマーの生活史法は本稿の目的を達成するうえで有効だと考える。

10.「一時的な仕事についた者」「左記以外の者」を「進路未決定」に再カテゴリー化した。

11. 便宜的に，「臨時的任用教員（常勤講師）および非常勤講師」を「非正規教員」に再カテゴリー化した。以降，非正規教員の生活史や語りを検討するなかで「臨時」「非常勤」「非正規」といった単語を適宜用いるが，互換的な意味で用いる。

12. 2010 年に開催された第 6 回沖縄県議会の定例会において，県内の臨時的任用教員の割合が高い要因について当時の教育長は次のような説明を行なっている。「学級担任等の基本的な教職員定数とは別に習熟度別指導や少人数指導の実施のため特例的に措置される加配定数について，沖縄県では，臨時的任用教員で対応しているためと考えております。加配定数については，文部科学省の裁量によって決定されており，また年度ごとに変動するため臨時的任用教員で対応してきたところであります」。この説明からは，制度的・財政的な事情から非正規教員が生み出されていることがわかる。今後は，教育予算に占める人件費についての詳細な検討が必要だろう。また，沖縄という地域事情に照らしてみると，U ターンを典型とする若者の強い地元志向と，それに伴って生じる那覇都市圏への人口集中（谷 2014）が，採用試験の難関化の背景として指摘できる。さらにいうと，那覇都市圏の経済構造の脆弱性が教職志向を強めているのかもしれない。いずれにせよ，非正規教員の増加傾向を制度的・財政的な問題にのみ還元するのは不十分であり，那覇都市圏という「特定の都市」の社会・文化・経済的な側面も同時に視野に入れる必要がある。ここに，非正規教員の経験を「都市文化研究」として論じる意義があると思われる。

13. 非大都市圏のように大卒労働市場が狭隘であればあるほど，給料の高低だけでなく，「人気の高い職業」として，つまりシンボリックな意味において教職が優位な条件として現出している（吉川 2001）ことも看過できない。

14. トモコさんの「自分が勉強し過ぎて寝不足で，子どもたちにうまくできないくらいだったら試験受からなくても」「この子たちのために自分が頑張ればいい。自分のことは二の次」という語り

が示すように，受験しないことそれ自体が「生徒のために」といった教員固有のロジックによって正当化されている点も重要だろう。かかる事態は，教育社会学的なテーマとして興味深いが，本稿の議論とは水準が異なるため，別の機会で論じたい。

参考文献

新井立夫・石渡嶺司，2013,『教員採用のカラクリ ――「高人気」職のドタバタ受験事情』中央公論新社

布施哲也，2008,『官製ワーキングプア ―― 自治体の非正規雇用と民間委託』七つ森書館

グループ・ディダクティカ編，2012,『教師になること，教師であり続けること ―― 困難の中の希望』勁草書房

早川征一郎・松尾孝一，2012,『国・地方自治体の非正規職員』旬報社

本田由紀，2005,『若者と仕事 ――「学校経由の就職」を超えて』東京大学出版会

井上いずみ・村松泰子，2007,「臨時的任用教員の就業意識とその実態」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』58:，515-531 頁。

乾彰夫，2010,『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち ―― 個人化・アイデンティティ・コミュニティ』青木書店

金子真理子，2014,「非正規教員の増加とその問題点 ―― 教育労働の特殊性と教員キャリアの視角から」『日本労働研究雑誌』645，42-45 頁。

苅谷剛彦・本田由紀編，2010,『大卒就職の社会学 ―― データからみる変化』東京大学出版会

吉川徹，2001,『学歴社会のローカル・トラック ―― 地方からの大学進学』世界思想社

岸政彦，2015,「鉤括弧を外すこと ―― ポスト構築主義社会学の方法論のために」『現代思想』7 月号，188-207 頁。

小杉礼子，2003,『フリーターという生き方』勁草書房

熊沢誠，2006,『若者が働くとき ――「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず』ミネルヴァ書房

舞田敏彦，2013,『教育の使命と実態 ―― データからみた教育社会学試論』武蔵野大学出版会

溝上慎一，2014,「学校から仕事へのトランジションとは」溝上慎一・松下佳代編『高校・大学から仕事へのトランジション ―― 変容する能力・アイデンティティと教育』ナカニシヤ出版，1-39 頁。

朴沙羅，2011,「物語から歴史へ ―― 社会学的オーラルヒストリー研究の試み」『ソシオロジ』第 56 巻 1 号，39-54 頁。

Plummer, K., 1983, Documents of Life: An Introduction to the Problems and Literature of a Humanistic Method: London, George Allen & Unwin Ltd.（＝1991，原田勝弘・川合隆男・下田平裕身監訳，『生活記録の社会学 ―― 方法としての生活史研究案内』光生館）

琉球大学教育学部，2011,『沖縄県内の公立小学校・中学校・高等学校教員の現職研修に関する調査 第 1 次報告書』

桜井厚，2002,『インタビューの社会学 ―― ライフストーリーの聞き方』せりか書房

――――・石川良子編，2015,『ライフストーリー研究に何ができるのか ―― 対話的構築主義の批判的継承』新曜社

妹尾渉，2010,「全国の『教員評価』実施動向から」苅谷剛彦・金子真里子編『教員評価の社会学』岩波書店，11-20 頁。

高井良健一，2015,『教師のライフヒストリー ―― 高校教師の中年期の危機と再生』勁草書房

谷富夫，2002,「エスニシティ研究と世代間生活史調査」『フォーラム現代社会学』創刊号，70-80 頁。

――――，2014,「沖縄的なるものを検証する」谷富夫ほか編『持続と変容の沖縄社会 ―― 沖縄的なるものの現在』ミネルヴァ書房，2-22 頁。

内田良，2015,『教育という病 ―― 子どもと先生を苦しめる「教育リスク」』光文社

上林陽治，2012,『非正規公務員』日本評論社

――――，2013,『非正規公務員という問題 ―― 負われる公共サービスのあり方』岩波書店，74-94 頁。

上原健太郎，2013,「沖縄県における経済的特性と不平等」『沖縄における階層格差と人権』2012 年度龍谷大学人権問題研究委員会助成研究プロジェクト中間報告書，龍谷大学，6-14 頁。

――――，2014,「沖縄大卒者のローカル・トラック」谷富夫ほか編『持続と変容の沖縄社会 ―― 沖縄的なるものの現在』ミネルヴァ書房，83-105 頁。

渡邉太，2015,「非正規の自立 ―― 大学労働の経験から考える」『フリーターズフリー』3 号，フリーターズフリー，

山内乾史・原清治編，2010,『学歴と就労の比較教育社会学 ―― 教育から職業へのトランジションⅡ』学文社

油布佐和子，2009,「教師という仕事 序論」油布佐和子編『リーディングス 日本の教育と社会⑮　教師という仕事』日本図書センター，3-18 頁。

Aspiring to Become a Full-Time Teacher: Temporary Teachers in Okinawa

Kentaro UEHARA

This paper discusses temporary teachers who aspire to work full-time from the perspective of the sociology of education, namely, “the transition from school to employment.” Irrespective of the fact that the increase in temporary teachers is becoming a social problem, previous studies have failed to address these people directly. The few studies that do exist have made clear that temporary teachers are structurally produced, become full-time instructors around the age of 30, and until then are content working on a temporary basis. Taking into account these findings, this paper considers the following three questions: (1) What is the situation for the young people who work as temporary teachers for some time after graduating from university? (2) What do they think of their circumstances? and (3) What conditions contribute to their satisfaction? This study specifically focused on the young adults of the Okinawa region.

The analysis demonstrated that temporary teachers find themselves in a very demanding situation that is fluid, asymmetrical, and pressured. In addition, the study revealed that the conditions of job satisfaction and fulfillment, high pay, and full-time jobseekers’ networks alleviate the demanding circumstances imposed on temporary teachers. Nevertheless, these conditions came to the foreground as aspects of the teaching world. Furthermore, the study showed that temporary instructors’ aspiration to “become full-time teachers” gradually fades as time passes. In other words, a reality has emerged that does not match the claims of previous research－that temporary teachers become full-time around the age of 30 and until then are satisfied with temporary jobs.

Keywords：temporary teachers, full-time teacher, transition from school to employment, Okinawa, life History